

【資料紹介】 壹岐市小場遺跡出土の抉りを有する石器について

森 貴 教

2024年 5 月

『西海考古』 第14号 抜刷

# 【資料紹介】 壱岐市小場遺跡出土の抉りを有する石器について

森 貴教

## 1. はじめに

長崎県壱岐市小場遺跡第1次調査で、片側縁に1つの抉りをもつ石器の未成品（以下、本資料）が出土している。本資料は、表土の除去中に採集された未報告（報告書未掲載）の石器製作剥片・チップ類とともに、石器素材として袋に同封されていたものである。2022（令和4）年7月11日に壱岐市立一支国博物館にて、資料調査および理化学的分析のための試料選別を行った際、筆者が発見した。

近年、本資料の特徴である側縁部の抉りは、目釘を用いて柄に固定させる際の機能部と認識され（寺前 2010）、柄との結合方式の観点から石戈のほか磨製石鎌、磨製石斧が検討されている（寺前 2012）。これまで壱岐島内における目釘式の石器の類例は非常に少ないため（註1）、その学術的な価値が高いものと思われた。そこで本稿では本資料を紹介し、資料の意義について若干の考察を行いたい。

## 2. 出土遺跡（第1図）

本資料が出土した小場遺跡は、壱岐島北西部の片苗湾に流れ込む刈田院川の中流部、長崎県壱岐市勝本町立石東触に所在する。片苗湾は近世以降の干拓によって海岸部が埋め立てられ、現在は「片苗新田」として土地利用されている。弥生時代当時、刈田院川の河口部から直線距離で約1.0km以内陸に入った標高約40mの微高地上に位置する。本遺跡から北東方向に約400m離れた標高約80mの丘陵部の周辺に、一支国を構成する弥生時代の集落遺跡として著名なカラカミ遺跡が所在する。

本遺跡は1952（昭和27）年7月31日に地元の郷土史家の松本友雄により小形甕棺墓が発見され、同年8月1日から、森貞次郎により調査がおこなわれた。この発掘調査によって、甕棺墓の東側から新たに箱式石棺墓が検出された。その後の分布調査をふまえ、現在、甕棺墓および石棺墓の調査地点とその周囲が埋蔵文化財包蔵地範囲として登録されている。

本資料は、農道改修工事に伴い実施された2017（平成29）年度の小場遺跡第1次調査で出土した（田中・松見編 2021）。調査担当者によれば、重機を用いて行われた現耕作土である表土（1層）の除去作業中に排土で採取されたものである。調査では、溝1条、焼土坑1基、土坑3基、複数のピット、落ち込み状の遺構（流込み堆積遺構）が確認された。落ち込み状遺構の下部からは円形の竪穴建物跡1棟、道路状遺構1基が検出された。遺物包含層からは、弥生時代前期中葉から中期の土器が多く出土した。また、本資料のほかにも石器の未成品や剥片類、敲石や砥石が多数出土し、石器生産が行われていたと推測されている。

これまで壱岐島における弥生時代の集落遺跡の形成開始時期は、原の辻遺跡やカラカミ遺跡の出土遺物の内容から弥生時代前期後葉から前期末とされていたが、本遺跡からはやや時期的に遡る可能性のある土器が認められた点も遺跡の展開を考えるうえで重要である。

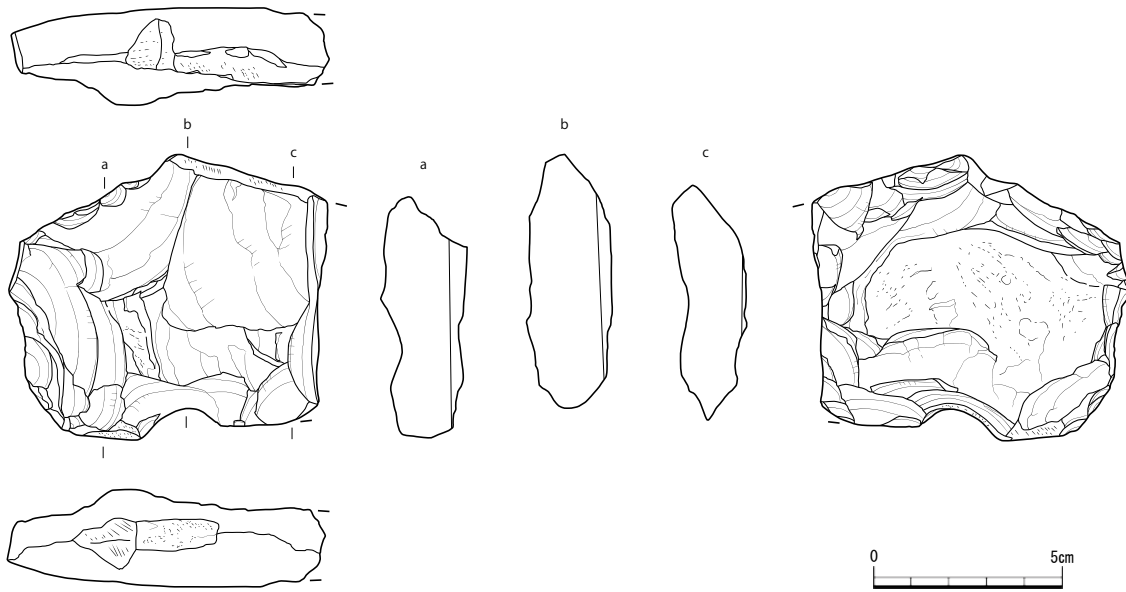


第1図 遺跡の位置 (S=1/250,000)

### 3. 資料解説 (第2図・写真)

本資料は、側縁部に抉りを1つもつ板状石器の未成品である。残存長8.5㍍、最大幅7.5㍍、最大厚2.6㍍、重量181.8㍉を測る。折損部からの推定で、全長約20㍍に復元される。葉理方向に沿った板状の細粒砂岩を素材とする。灰オリーブ (7.5Y6/2) と灰白 (7.5Y8/1) の色調をなす部分が互層状に接している。

平面形は五角形状を呈し、基端部から8.5㍍の位置で折損している。側辺からの粗い剝離調整によって全体の成形が進行しているが、裏面には自然面が多く認められる。また、側辺も基端部と折損部を除く3面に平坦な自然面が残存している。したがって、素材の大きさは本資料とさほど変わらない板状の礫であったと判断できる。



第2図 小場遺跡出土の石器 (S=1/2)

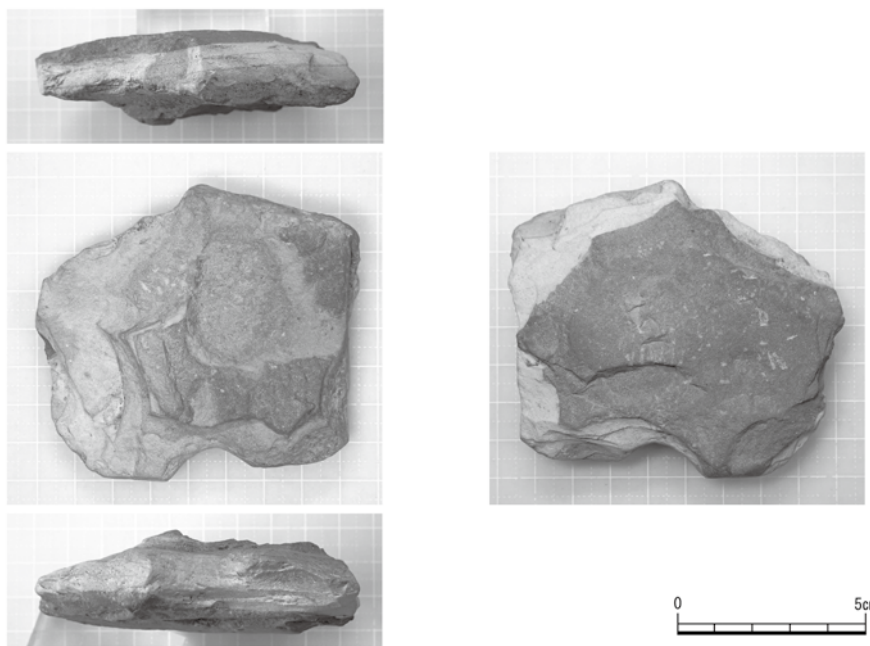


写真 小場遺跡出土の石器 (S=1/2)

基端部から4.5ㇼの片側縁に幅2.0ㇼ、深さ0.6ㇼの内湾する抉りを有する点が本資料の特徴である。抉りは敲打によって成形され、基端部側は礫面と接している。敲打痕は不明瞭だが微細な凹部が集中しており、敲打具と石器の間にドライバー状のパンチを当てた間接的な敲打の可能性はある。

横断面形は基端部に近い断面 a、抉りのある断面 b の位置で偏楕円形、断面 c の位置で抉りをもつ側が表裏の剝離によって両刃状をなす。断面 c の背部は平坦な自然面が残存しているため、凸レンズ状・菱形の横断面形を志向する尖頭器、すなわち目釘式石戈の未成品か、平坦な背部をもつ磨製石鎌の未成品かは判然としない。幅広で身が厚いことから、どちらかといえば目釘式石戈の可能性が高いと考える。中央から鋒部にかけて欠損するため、抉りの位置が上（背部側）か下かは不明である。

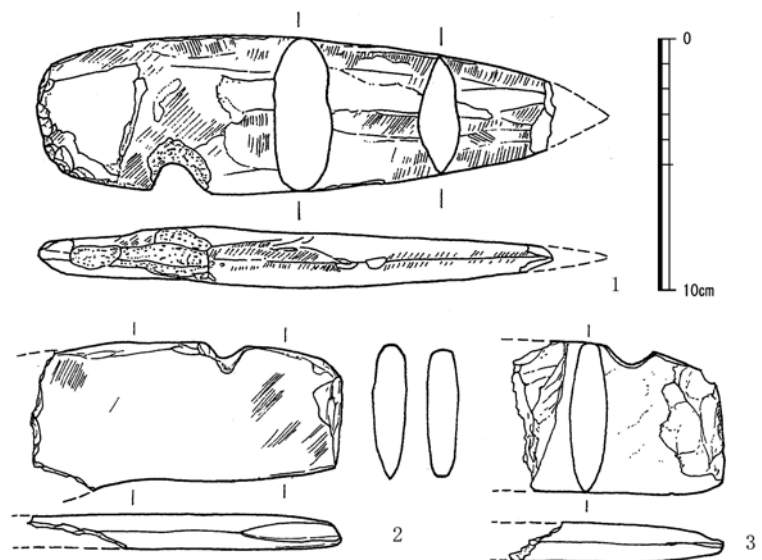
#### 4. 考察

本資料の系譜について、類例との形態比較によって考えてみたい。まず、磨製尖頭器の類例として福岡県北九州市高槻遺跡第9地点出土の磨製石戈が挙げられる（第3図1）。寺前（2010）による分類では、両側縁下半に関をもたない目釘式石戈A類にあたる。抉りの部分の厚さは約2ㇼで、研磨調整が進んだものとすれば本資料に近似する。さらに、高槻遺跡出土品は細粒砂岩製と報告されており（木太久編 2000）、報告書の写真図版では本資料の石材と類似する。細粒砂岩や凝灰質砂岩といった堆積岩類は、北九州市の金剛山遺跡群（門田遺跡、辻田西遺跡など）や高津尾遺跡群で多く認められる石器石材である（梅崎 1999）。北西側斜面（遺物包含層）から出土したもので明確に遺構に伴うものではないが、弥生時代前期末から中期初頭の土器が多く出土している。目釘式石戈の出現時期は、福岡県遠賀町尾崎天神遺跡5号不明遺構の出土例が板付Ⅱb式にやや後出する土器群と共伴することから弥生時代前期後葉から前期末で、中期中頃の時期まで確認されている（寺前 2010, p.103）。

次に磨製石鎌の類例として、福岡県飯塚市立岩遺跡群出土のものがある（第3図2・3）。本資料よりも身が薄いものの、2は基端部から抉りまでの長さが約4.8ㇼで本資料と近似する。抉りを有する磨製石鎌も、目釘式石戈に近い時期に出現したと考えられている（寺前 2012, p.24）。

壱岐島の表層地質は主に火山岩類・火砕岩類（玄武岩、安山岩など）から構成される（鎌田1992）。泥岩や砂岩といった堆積岩類自体は、壱岐島の北部を中心に分布する勝本層群でも認められるものの、本資料のように板状の形態で散布しておらず、石器として用いられるような良質なものはないようである（註2）。また、同じ壱岐島内の原の辻遺跡で多く確認される<sup>きんせいせき</sup>堇青石ホルンフェルス製石鎌の形態は、基部側面と背部の間に屈曲をもつ特徴があるが（能登原 2012）、本資料とは形態・石材がまったく異なる。

今後、岩石学・地球化学的検証を行う必要があるものの、片側縁に抉りをもつ石器（目釘式石戈・磨製石鎌）が九州では弥生時代前期末前後に東北部九州



第3図 磨製石戈・磨製石鎌の類例 (S=1/3)  
1. 高槻（北九州市） 2-3. 立岩（飯塚市）

を中心に出現し分布すること（寺前 2010）を重視すれば、本資料はこの時期を上限年代として東北部九州から未成品もしくは石器の素材として搬入された可能性が考えられる。

また、本資料が製品ではなく未成品であることも示唆的である。目釘式石戈・磨製石鎌のような、特徴的な着柄方式をとる磨製石器の情報を知る石器製作者が、本遺跡に存在したことを示しており、壱岐島における石器生産の契機を考察する上で非常に重要といえよう。

## 5. おわりに

本稿では小場遺跡第1次調査出土の石器未成品を報告した。類例との形態比較から、本資料は片側縁に抉りをもつ目釘式石戈もしくは磨製石鎌の未成品と考える。こうした石器は九州では弥生時代前期末前後に東北部九州を中心に出現し、その分布の中心が認められる。本資料は、壱岐島内で採取できないと推定される細粒砂岩を素材とし、原の辻遺跡で見られる石鎌とも形態・石材が異なることから、東北部九州から未成品もしくは石器の素材として搬入されたものである可能性を指摘した。壱岐島における弥生時代の集落形成の歴史的な背景、石器生産の契機や人々の交流関係を探るうえで、本資料は非常に重要な意義を有するものといえる。本稿が関連する研究の一助となれば幸甚である。

なお本資料は壱岐市教育委員会にて保管・収蔵される。本資料の報告にあたり、寺前直人氏からご教示を賜った。資料の借用および調査では壱岐市教育委員会の田中聡一氏、松見裕二氏、長崎県埋蔵文化財センターの白石溪冴氏、中野真澄氏にお世話になった。末筆ながら深く感謝申し上げる。

本研究はJSPS 科研費（JP21K00970・JP21K00954）の助成を受けたものである。

### 【註】

註1 明治40年代に香良加美神社の社叢内にあった社殿を石積みの祠に造り替える際に発見された、カラカミ遺跡出土の「磨製石剣」（松見編2022, pp.86-87）は、基部の左右両側縁に1箇所ずつ抉りがある。わずかな関部と抉りの位置は左右非対称であるため、石剣ではなく目釘式石戈の可能性がある。

註2 2022（令和4）年7月10日に福岡大学理学部の柚原雅樹氏とともに壱岐島内の巡検を行い確認した。また長崎県埋蔵文化財センターの白石溪冴氏より露頭の情報についてご教示を頂いた。

### 【引用・参考文献】

- 梅崎恵司 1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』第13号 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 19-30頁
- 鎌田泰彦 1992「(2) 新第三系～更新統」『日本の地質9 九州地方』共立出版, 123-128頁
- 木太久守偏 2000『高槻遺跡第9地点－槻田小学校校舎建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告2－』北九州市埋蔵文化財調査報告書第242集 財団法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 田中聡一・松見裕二編 2021『小場遺跡・原の辻遺跡』壱岐市文化財調査報告書第31集 壱岐市教育委員会
- 寺前直人 2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会
- 寺前直人 2012「着柄時に目釘を用いた石器」『駒澤考古』第37号 駒澤大学考古学研究室, 15-26頁
- 能登原孝道 2012「堇青石ホルンフェルス製石鎌の生産と流通」『西海考古』第8号 西海考古同人会, 83-92頁
- 松見裕二編 2022『カラカミ遺跡 総括編 I』壱岐市文化財調査報告書第33集 壱岐市教育委員会

### 【挿図出典】

第1図：田中・松見編2021掲載図をもとに筆者作成，第2図：筆者実測・製図，写真：筆者撮影，第3図：寺前2016掲載図を転載。